

所長挨拶

橋本 茂

前所長の田村先生も、所長代行の小田島先生も、健康にすぐれず、結局お二人に代わって、私が1年間だけ所長としてお手伝いすることになりました。他の役職にある私にとっては、心身共に、しんどい職務であるというのが、正直な気持ちです。ただ、うれしいことは、お二人の先生の健康が回復しつつあるということです。

12年ほど前に、私はキリスト教研究所の活動に深くコミットしたことがあります。その時の所長は経済学部の工藤英一先生で、私は主任でした。その時のうれしい思い出は、アウシュヴィッツ博物館の副館長であったシマンスキー先生をお招きして、講演をしていただき、その講演を収録した本（『現代世界に生きるキリスト教』）を出版したことです。悲しい思い出は、工藤先生が所長在任中に病にたおられ、帰らぬ人となったことです。

どうも、私のキリ研との関わりと、所員の先生方の健康と関係あるようです。健康に気をつけて、職務に励むつもりですので、みなさまのご協力をお願いします。

副手の退職に伴い、その後任人事をめぐる学長との交渉が長引き、後任の教学事務アシスタントの山岸さんをお迎えしたのが5月でした。5月すぎてから、新所長の私、新主任の水落先生、そして新アシスタント山岸さんの3人がやっとそろい、99年度の本格的な研究所の活動が始まったという状況です。

さて仕事、という時になって、驚いたことは、所長の机も、主任の机もないことでした。「机は？」と聞くと、「適当なとこ

ろに座れば」という有様です。また、談笑するための机と椅子はあっても、所員会議や、14～15人で共同研究するための机がないことでした。また、研究員はといえば、研究所の隅っこにおかれ、これでは、所員との間の日常的な人間関係も結ばません。

部屋のレイアウトは、人間関係のあり方に影響を与え、その結果、その組織の目標達成を大きく左右する、と言うのが社会学の常識です。

私の所長としての最初の仕事は、所長と主任の机と、14～15人用の会議用の机を確保し、次に、研究所活動を効率的にするための、部屋のレイアウトについて再考し、模様替えすることです。

30年連れ添ってきた妻は、私が書斎をよく模様替えする性癖を見て、「あなたは社会学的な常識に基づいて部屋の模様替えすることが本当に好きね。でも模様替えして、あなたの業績がどれだけ上がったの」と、社会学者の私に大きな疑問を抱いているようです。

まあ、適当に変化を加えながら、キリ研として研究業績を地道に積み上げていきたいと思っています。ご協力とご指導をお願いします。

(はしもと しげる 所長、社会学部教授)